

土鈴（どれい）

中村 龍介

二年ほど前、今のマンションに転居するのに併せ、都内のトランクルームに預けてあった家財を引き取った。中身は、先の震災で倒壊した神戸の実家からサルベージしてきた品々。保管先の倉庫で大型コンテナを開けてみて驚いた。十年以上もの間外気に触れなかった所為か、大半がカビだらけで半分は廃棄せざるを得なかった。

それでも、仏壇や桐の火鉢、それに、高価そうな花瓶類、また由緒ありげな掛け軸などを選別して残すことにした。その中に、亡き父のコレクションだった、数多くの土鈴がある。

以前は、神戸の実家の応接間にところ狭しと並べてあったのを想い出す。最初は何処かの神社で買い求めた土鈴の素朴さに惹かれて集め始めたものだ。そのうちに、知人、友人からのお土産品も加わって、飾りきれないものがダンボール箱一杯に保管されていた。

震災の衝撃で殆どが割れてしまった。何とか無傷のものを拾い集めて箱に入れておいた。

十数年振りに陽の目を見た土鈴は、どれも泥を被っていて震災の激しさを物語っていたが、丁寧に水で洗い、新聞紙の上で乾かした。

土鈴を飾るための飾り棚を近所の家具店で買い求め、和室の正面に陳列してみた。河童、サル、ウサギ、ヒョットコ、ニワトリ、鬼など、様々な色や形の土鈴が整列した。それぞれ独特の表情があつて面白い。

明治生まれの父は、ご多聞に漏れず典型的な亭主関白。社会的には成功者だったかもしれないが、家庭では必ずしも良き父とはいえなかった。母も表立った抵抗こそしなかったが、内心では決して父に服したわけではなく、面従腹背を通した。強情で自信家の父は、第一線を退くと間もなく、今でいう認知症の兆候が出始め、最後は近くの病院で亡くなった。

七四歳での他界は早すぎた。会社を追われるように引退し

てからは、すっかり自信を失い、哀れな晩年だったといえる。
私には反面教師的存在だった父も、一人息子の私に対しては、父なりのやり方で愛情を注いでくれたことは確かだと思
う。

それに対して、私の方から感謝の気持ちを表立って伝えた
ような記憶は、残念ながら、思い当たらない。

今般、終の棲家となった我が家の和室に父のコレクション
を陳列しようと思いついたのは、土鈴の魅力もあるが、実は
生前なしえなかった、父に対するささやかな敬意の表現なの
かもしれない。

(了)

〔二〇〇九年十月記 原稿用紙約三枚 課題「自由課題」〕



(参考写真)